

第4章

温病の弁証

温病の弁証では、衛氣營血弁証と三焦弁証が主体である。

1. 衛氣營血弁証

衛氣營血弁証えきえいけつは、清代の葉天士の創設である。《内経》および先人の衛氣營血に関する論述をもとに、自己の臨床経験を結びつけたうえで理論化し、温病の病理変化および症候を概括した弁証論治の方法である。

1) 衛氣營血の症候と病理

衛分証（えぶんしょう）

衛分証は、温熱の邪がはじめて人体を侵襲し、肺衛と相争し衛氣そあつを阻遏した病変である。症候の特徴は、発熱・微悪風寒・頭痛・無汗あるいは少汗・咳嗽・口渴・舌の尖辺が紅・舌苔が薄白・脈が浮数などで、弁証の要点は発熱・微悪風寒とわずかに口渴がある。

《靈枢》本臟篇に「衛氣は分肉を温め、皮膚を充たし、腠理そうりを肥やし、開闔かいこうを司るゆえんのものなり」とあるように、衛氣は主として体表に敷布して肌膚の温養をたすけ、外邪の侵襲に抵抗して驅邪外出し、内は肺氣と相通じて毛孔・汗腺の開闔を司る。温病の初期は、温熱の邪を上を受けてまず肺衛が侵され、肺の合である皮毛に病変が生じ、衛氣がまず邪に抵抗する。衛氣と邪が相争して発熱し、衛陽が邪に阻遏されて肌膚を温養できないと悪寒を生じるが、温熱の邪による病変なので寒軽熱重である。また、邪が肺衛を鬱阻して皮毛の開闔が失調すると、無汗あるいは少汗を呈する。頭は「諸陽の会」であり、陽熱が清空を上擾すると頭痛が生じ、衛氣が鬱阻され肺氣が宣降できないと咳嗽があらわれる。また、温熱の邪は津液を消耗するため口が渇き、熱が表に鬱すると舌の尖辺が紅・脈が浮数を呈する。舌苔が白は、病変の初期であることを示す。以上のように、邪襲肺衛・肺氣失宣が衛分証を特徴づける病機である。

邪が衛分にあるのは病変が最も浅く、一般に軽症で持続時間も短く、治療が正確で時期を失しなければ、邪を表から除ける。邪の程度が甚だしいか治療が不適當であれば、病勢が進展して邪は氣分に伝入する。心陰虚の体質・感受した邪が強いとき・失治や誤治による心陰劫傷では、邪が肺衛から心包に逆伝して病状はより悪化する。

気分証（きぶんしょう）

気分証は、邪が裏に入って気機を阻害した病変で、胃・腸・胆・胸膈など病変部位の違いで症状が異なる。陽明熱盛がよくみられ、特徴は壯熱・悪寒がない、悪熱・多汗・口渇がある、冷たい飲みものを欲する、舌苔が黄で乾燥、脈が洪大などである。一般に、気分証の弁証の要点は壯熱・不悪寒・口渇・舌苔黄である。

気は生命に不可欠な物質の一つで、臟腑百骸を活動させる機能発現の基礎であって全身を防御する機能を持ち、《靈樞》決氣篇には「上焦は開發し、五穀の味を宣べ、膚を燻じ、身を充たし、毛を沢す、霧露の漑ぐがごとし、これ気たり」とある。衛分の邪を取り除けなければ、必ず裏に向かって伝変して気分に入り、気機を障害する。邪が陽明気分に入ると、邪正が激烈に相争して、つよく発熱し、内部の陽熱が体表部へと外汜すると、悪寒は消失して悪熱があらわれる。裏熱が蒸騰し津液を外迫すると多量の汗が出て、熱邪による傷津と同時に、汗として津液を失うためにつよい口渇を生じ、冷たい飲みものを欲しがらる。熱盛であるから舌苔は黄に変化し、熱により気血が涌騰するため脈は洪大になる。陽明熱盛の病理的特徴は、邪盛でかつ正気の抵抗力が強いため邪正相争が激しく、熱盛になり津液を消耗することである。

気分の病変は衛分より深く、経過が長くて症状も重いが、正気がまだ衰えておらず抵抗力もあるため、時期を失せず適切な治療を行えば治癒する。治癒できないと、邪盛正傷となり進展して営分・血分に内陷する。ただし、陽明熱盛は気分証のうちの一つの病変にすぎず、邪が表から裏に入っているが入営動血には至っていないすべての病証が、気分証の範囲に属する。

営分証（えいぶんしょう）

営分証は、熱邪が深入して営陰を劫灼し心神を擾乱する病変である。症候の特徴は、夜間の高熱・口は乾くがあまり飲みたくない・心煩・不眠・時に譫語・不鮮明な斑疹・舌質が紅絳・脈が細数などである。弁証の要点は夜間の高熱・心煩・譫語・舌質紅絳である。

《素問》痺論篇に「営は、水穀の精気なり、五臟を和調し、六腑を灑陳（散布の意味）し、すなわちよく脈に入るなり、故に脈を循り上下し、五臟を貫き、六腑に絡すなり」、《靈樞》邪客篇に「営気は、その津液を泌し、これを脈に注ぎ、化してもって血となり、以て四末を榮し、内は五臟六腑に注ぐ」とあるように、営は水穀の精微から生じ、脈中に流注し血液の組成成分になって運行し、全身を栄養する物質で、血中の津液とみなすことができる。清泄されない気分の熱邪が津液を劫灼して営分に侵入したり、あるいはもともと営陰に虚があり、邪が肺衛から営分に内陷したり、あるいは体内に鬱伏した熱邪が徐々に営陰を消耗して、営分から病変が発生する。営分に陥入した熱邪が津液を灼傷するため、口渇・脈が細数・舌質が紅絳を呈する。衛気が陰分に入る夜間には邪正相争が激しくなるため、夜間に高熱が出る。邪熱が血中の津液を蒸騰して口に上承するため、口は渇くが飲みたくないあるいは口渇がない。営熱が血絡に波及して迫血外出する趨勢にあるため、不鮮明な斑疹が生じる。営は心に通じ、心は神明を主るため、邪熱が心神を擾乱して意識を障害し、軽ければ心煩・不眠、重ければ譫語・意識消失などをきたす。以上のように、営分証の病

機は営分熱盛・熱損営陰・擾乱心神である。

営分の病変は気分より深く血分より浅いため、邪は外方の気分に転出するか、内陥して血分に入ることになり、適切に治療して邪を気分に出させれば軽快に向かい、そうでなければ血分に深入して危急状態に陥る。

血分証（けつぶんしょう）

血分証は、熱邪が深入して耗血・動血をひき起こした病変である。症候の特徴は、発熱・躁擾・意識障害・譫語・舌質が深絳などを呈し、吐血・鼻出血・血便・血尿・瀰漫性の斑疹などの出血症状がみられる。弁証の要点は、舌質が深絳・斑疹・出血である。

《靈樞》決気篇に「中焦は気を受け汁を取り、変化して赤し、これを血という」、《靈樞》本臟篇に「人の気血精神は、生を奉じて性命を周らすゆえんのものなり。……これ故に血和せば、すなわち経脈は流行し、復して陰陽を営り（内外を営運し）、筋骨は勁強し、關節は清利するなり」とあるように、血は脈中を流れて全身をめぐり、気を載運し津液を布散して五臓六腑・四肢百骸を栄養する。営分の熱邪が気分転出せずに留まると必ず血分に陥入し、衛分・気分の邪も血分に直接侵入することがある。熱邪が血分に入ると、営分の病変が増悪するだけでなく、一面では熱毒過盛で血絡の損傷を加重し迫血妄行して、口・鼻・大小便の出血あるいは斑疹をひき起こし、一面では邪熱が耗血するとともに血と熱が結びついて脈絡内で広範な瘀血を形成し、営運を障害し気血を阻滯して瘀熱交結を生ずる。心は血を主り、神を蔵すため、熱邪が入血すると心神が擾乱して躁擾・意識障害・譫語が生じる。以上のように、血分証の病機は熱甚迫血・熱瘀交結である。

熱入血分は病位が最も深く、温病の極期・末期にみられ重篤である。邪勢が衰えず正気が衰微すると、病状が急速に悪化するが、積極的に適切な治療を行って邪勢を減衰させ正気が回復すれば次第に快方に向かう。

表に衛氣營血の病理・症候・弁証の要点を示す。

2) 衛氣營血の病位と相互伝変

衛・気・営・血は、密接な関連性があり分割できない。「気」は、体内を流動する精微物質の一つであるが、主には物質的な基礎のもとに発現する人体の各種の生理的機能に相当する。「衛」は気の種類であり、脈管外をくまなく運行する気で、三焦を通じて内は臟腑に、外は皮膚・筋肉に分布し、体表を保護して外邪の侵入を防止し、汗腺・立毛筋を調節して体温を調整し、臟腑を温め皮膚を潤滑に保つ機能がある。非特異的あるいは特異的な免疫能や汗腺の調節機能を指し、防衛の気である。「営」は衛との対比で「営陰」とも呼ばれ、脈中にあり、血とともに脈管内を循行し、変化して血を生成し全身を栄養・滋潤する。「血」は、血液のもつ濡養（栄養・滋潤）作用とその物質的基礎のことである。衛と気は「陽」に、営と血は「陰」に属する。

以上に述べたように衛は表を主っており気の一部で、衛は気の浅層に相当する。営は血中の津液で血液の一部で、営は血の浅層に相当する。葉天士は「衛の後にはじめて気を行い、営の後にはじめて血を言う」と述べ、衛氣營血の生理と病理から、温熱の邪が侵入し

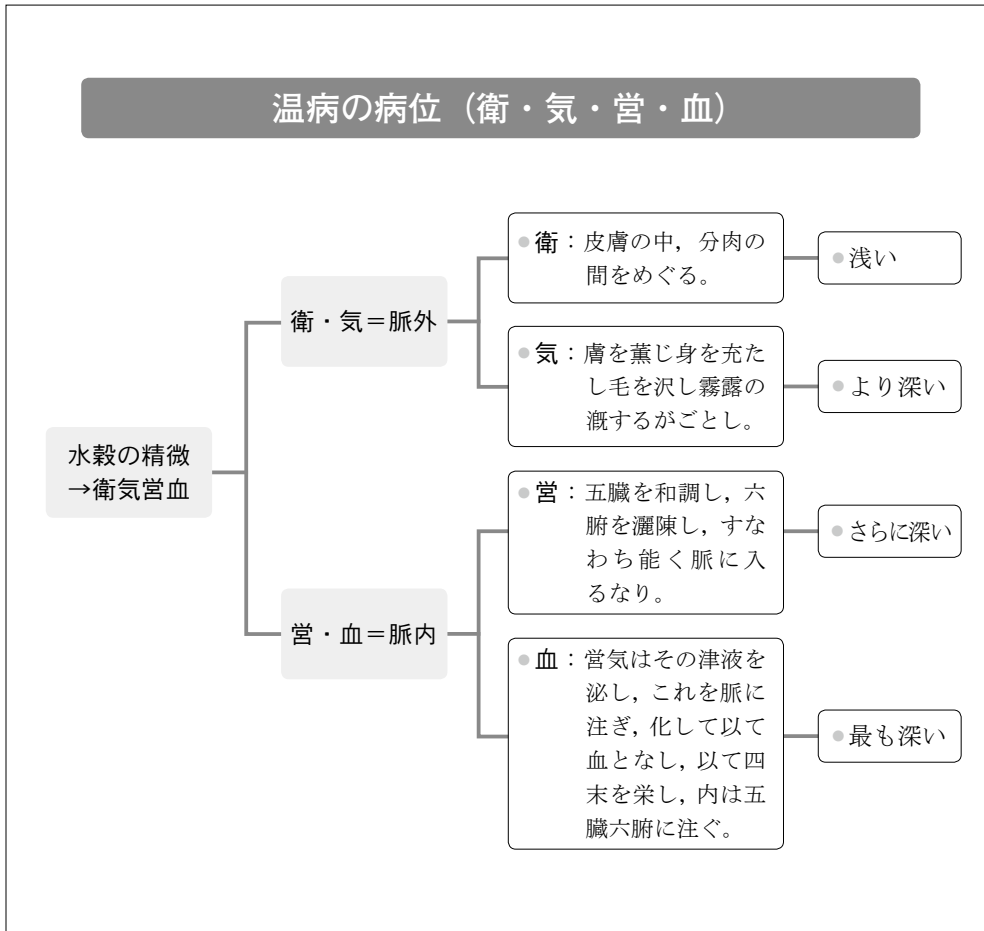


表 衛気営血弁証

| 証 | 病理 | 症候 | 弁証要点 |
|---|--------------|---|--------------------------|
| 衛 | 温邪襲表 肺衛失宣 | 発熱・微悪風寒・頭痛・無汗あるいは少汗・咳嗽・口は微渴・舌尖辺紅・苔薄白・脈浮数 | 発熱・微悪寒 口が微渴 |
| 気 | 邪入気分 熱熾津傷 | 高熱・悪寒せず反って悪熱・汗が多い・渴きがあり冷たいものを飲みたがる・尿が濃い・舌質紅・舌苔黄・脈数有力 | 高熱 悪寒がない・口渴 舌苔が黄色い |
| 営 | 熱灼営陰 擾乱心神 | 身熱があり夜間に甚だしい・口が乾燥するがあまり飲みたがらない・ぼんやりした斑疹・心煩があり眠れない・時に譫語がある・舌紅絳・脈細数 | 夜間に顕著な身熱 心煩譫語 舌紅絳 |
| 血 | 熱盛迫血 熱瘀交結 | 身熱があり触診すると熱い・吐血・鼻出血・血便・血尿・びっしりとでる斑疹・意識混濁し異常な行動がありじっとしていない・舌深絳 | 斑疹 出血症状 舌深絳 |